増産から連続災害が

生産を制限し保安点検を

会社の責任を追及

三池労組は、連続災害、なかでも多数の労働者が死傷するほどの大災害となった西山鉱の暴走炭車激突事故を重く見て、このほど三井三池鉱業所の織田亮三郎所長に対し、「責任の所在を明確にすること」など十二項目にわたる要求を出し、団体交渉を通じて会社責任を追及している。

四山鉱大災害直後の五月二日、三池労組は団体交渉を通じて重大な会社の災害責任を追及するとともに、増産体制のなかで置きざりにされている保安管理を改善し、誠意をもって坑内保安の確立をはかるよう要求した。

要求内容は、次の通りである。

(1)連続して発生した重大災害についての責任の所在を、明確にすること。

(2)重大災害の激増は、生産重視に基づくものである。生産に注ぐ熱意を、保安確立に注ぐため生産制限を行なうこと。

(3)三池炭鉱全職場の保安総点検を実施し、法違反や危険個所など即刻一掃し、法規違反の個所や作業は絶対に放置しない気風を確立すること。

(4)保安責任の副長を各鉱に配置し、保安確立のための教育、企画、現場指導などの強化を行なうこと。

(5)点検を強化すること。

1、全係員による作業前後のチエックを確実に行ない、結果を保安部まで文書によって行なうこと。

2、機関車については、月一回精密点検を実施すること。

(6)運搬作業者、及び採炭・掘進など、休憩時間は必ず一時間とらせること。

(7)公休日の出勤者は、保安上必要最少限の人員に止どめること。

(8)立函の函止めについては、確実に二重函止めを実施すること。

(9)機関車は一定以上の速度では緊急停止装置をつけること。

(10)ループ線出口の函止めは、大型のものに改善すること。

(11)作業中の個所、または人車、列車などの離合時は徐行をすること。

(12)今次災害による朝倉さんの取り扱いは、直轄並にすること。

×

組合は非常事態宣言を発表して命と権利を守るために奮闘するべきことを訴えた。

非常事態宣言

（前省略）本年はじめから連続して起きた重大災害は、起こるべくして起きたことである。

三井資本は三池炭鉱に有明鉱を合併して以来、年間五百二十万トン出炭体制（全国の年間出炭額約千八百万トン）を達成するために三池新労組と締結している〝平和協定〟（スト権を売り渡す）を利用し、差別と低賃金はもちろん、保安法・諸規則を無視し、労働強化を押しつけながら、出炭に狂奔している。

三池労組は三池大爆発の教訓を生かし、今日まで「労働者は命までは売っていない」を合言葉に、家族ぐるみで命を守る反合理化闘争をすすめてきた。

それでも三井資本は絶対多数の三池新労組（三池労組約八百人。同新労組約四千人）に依拠して、攻撃を続けている。その結果、連続重大災害をひき起こした、といわなければならぬ。

三池労組はいかなる差別・弾圧が加えられようと、労働者の命を守るために、全力を尽して闘ってゆく。この闘いを前進させることは、災害を撲滅するだけでなく、三池炭鉱労働者の闘う統一をかちとり、不況・インフレのなかで苦闘する全国の労働者との連帯を、拡大・発展させる道につながることを確信する。

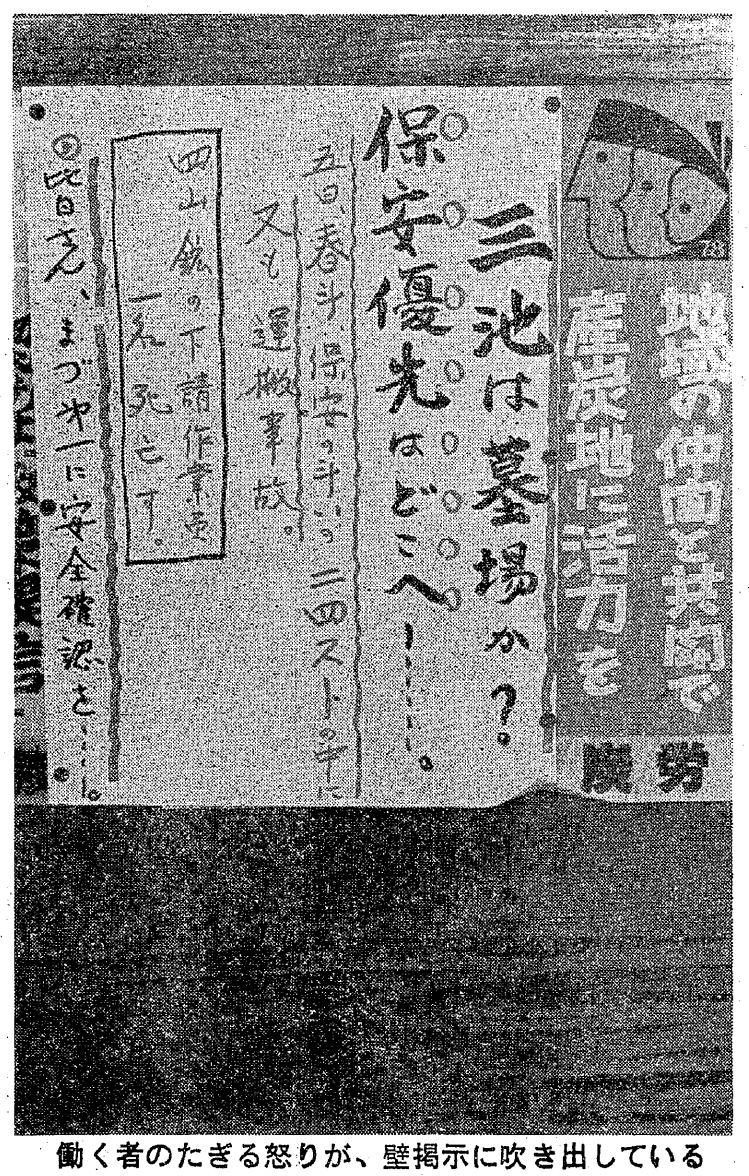
三池炭鉱に働く労働者の皆さん、会社の災害責任を追及し、保安優先の職場を確立しよう。

不安全施設は摘発し、改善要求を闘いとろう。

保安法、諸規則に違反した作業を拒否し、絶対法規を遵守しよう。

われわれは生産の犠牲にはならない。命と権利を守り抜くために奮闘することを宣言する。

（有はその要旨）



働く者のたぎる怒りが、壁掲示に吹き出している「三池炭鉱は墓場か」。ここは小浜南社宅。

解説

災害原因はどこに？

許せぬ会社の責任逃れ

別項記事にある、連続災害にともなう三池労組の要求に対する会社の態度は、これまでの姿勢から一歩もでず、にわかづくりの保安調査で各鉱の坑内点検を行なったり、保安教育を行なったりで切り抜けようとしている。

これと思われる施策といえば、下請工だった朝倉叶さんの死を直轄工なみに取り扱うことくらい。かんじんの責任問題については、これまでくり返してきた通り「遺憾と考えています」「新たな気持で対処したい」というばかり。法違反の事実を追及されると、返って「保安法に違反するような生産計画はたてていない。法規に違反してまでも生産を行なう意志はない」などと開きなおってさえいる。絶対に、数々の法規違反などのある事実をみとめようとはしない。責任を感じている態度といえるかどうか。

真の原因は？

第一に、会社が有明鉱を三池炭鉱に合併した昨年の十月以来災害がまき起こっている事実を指摘しなければならない。

昨年の十月五日、四山鉱で運搬災害発生。一人が両脚切断。

同月八日、三川鉱でコース切断により炭函逸走。

同月二十日、四山鉱の五百二十メートル本線坑道で脱線事故発生。

十一月二十一日、同鉱で人車が一両本線を逸走。

同二十九日、有明鉱で発破災害発生。二人重傷。

同三十日、四山鉱で炭壁突出のため一人死亡。三人重傷。

十二月二十八日、三川鉱で発破災害。係員重傷。

明けて一月十一日、三川鉱の払内で災害。一人死亡。

同十九日、三川鉱で一人が左足首断創の災害起きる。

三月三十一日、四山鉱の払面崩落。一人死亡。

四月二十五日、三川鉱で払の落口で落盤発生。宿久重春さん、下敷になり死亡。

ひき続き四月三十日、無人炭車暴走。坑底人車に激突。朝倉叶さん惨死。百四人が重軽傷。

五月五日、四山鉱で炭車脱線。境高雄さん死亡。

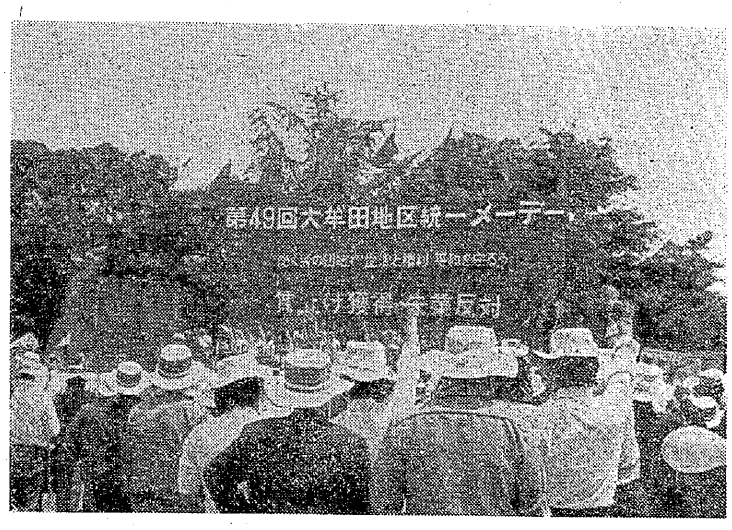
同八日、三川鉱で炭車脱線。田島輝久さんが重傷。

災害、事故はこの後なお続く。

会社は、有明鉱の合併を機に、従来五百二十万トンとしていた従来の、三池炭鉱の年間石炭生産計画を、五十四年度までの目標として五百三十万トンにひき上げ、増産体制にはいった。そしてZDや自主保安、前チエックなどの運動を労務政策の柱にしては、事故や負傷はほとんど労働者個人に押しつけながら、遮二無二重労働にかりたてていった。「四山鉱における運搬員の人たちは、昼食休憩もとれず、電車を運転しながら〝にぎりめし〟で昼食をとる」（新聞〝よつやま〟五月二日発行）というような事態が、広くつくりだされてきたのである。

現に、今の出炭能率（労働者一人月当たり生産額）は百トンを上まわる。

これは、経済性ばかりを重視した現在の石炭政策の性格を現わすばかりでなく、そのうえ三井独占資本の労働者を人間と見ない歴史的・基本的性格が増幅したものにほかならず、災害の原因はもっと深い。目先をごまかすことによって責任を回避する会社の態度が、許される道理がない。



「世界をつなげ花の輪に」の歌声が……

文化行事で上位入選

大牟田地区統一メーデー

第四十九回大牟田地区統一メーデーは、働く者のほか政党や民主団体の代表らも加わり、三千人が結集して開かれ、労働歌〝世界をつなげ花の輪に〟を合唱しながら市内をデモ。生活と権利、平和を守るために手をとり合おう、と市民に訴えた。

メーデー行事の一つ、囲碁・将棋大会（七月開催）が開かれ、三池労組は次の成績を占めた。

囲碁

団体戦で優勝と準優勝。本因坊戦で堺さん準優勝。

将棋

新人戦で野崎さんが準優勝。